

新潟町地区の変化とまちづくり

小林 隆幸

信濃川河口部左岸に位置する新潟市の中心市街地は、江戸時代の新潟町に重なります。時代とともに街も大きく様変わりし、今では「中心市街地活性化」や「まちなか再生」などと銘打ったまちづくりが試みられています。では、現在の中心市街地である新潟町地区（便宜的に呼称）ではどのようなまちづくりが行われてきたのか、その歴史を振り返ってみます。

堀と通りのまちづくり

今でもこの地域には信濃川に並行して「通り」が、それに直行して「小路」がめぐっています。こうした現在の街の原型は明暦元（一六五五）年の新潟町の移転に遡ります。新潟町は中世末から近世初頭にかけて何度か移転しており、明暦元年の移転とは元和三（一六一七）年につくられた新潟町からの移転を意味します。信濃川の流れが変化したため町は川岸から遠のき、港が機能しなくなっただけで場所を変えて再構築されたのです。

明暦元年の町割りの基本は、元和三年の町を引き継いでいますが、新たに南北に片原川（現東堀）・寺町川（現西堀）、東西に白山堀（後の一番堀）・新津屋小路堀（後の二番堀）・広小路堀（後の四番堀）・御祭堀（後の五番堀）が掘

られ、交通の動脈が確保されました。通りと小路が整備され、通りに面して店が立ち並び、現在にいたる街の基礎ができました。

南北の堀と通りは信濃川の流れに沿った地形に合わせて弓なりに整備され、それに直行するように東西の堀と小路が整備されています。つまり信濃川を軸に、そこから堀伝いに小船で荷物を輸送することに適した構造になっているのです。新潟の町は、船の往來を基盤に港の機能を優先して設計されてきたことがわかります。

そのため、港を活かした活動の中心は大川前など信濃川に近い地区に置かれ、生活する町人の精神的な活動を担う寺町が、信濃川から離れた町の奥手となる西堀に沿ってつくられました。信濃川から西の砂丘側へ、また生業活動の場から生活、精神活動の場へと、その機能が変化していきました。

こうして港に適したまちづくりが行われた新潟町は、江戸時代から明治にかけて、北前船とも呼ばれた廻船の一大寄港地として発展していきました。

自然環境から町を守る

日本を代表する二つの大河の河口につくられた新潟町は、港としての立地には申し分ありませんでした。しかし、

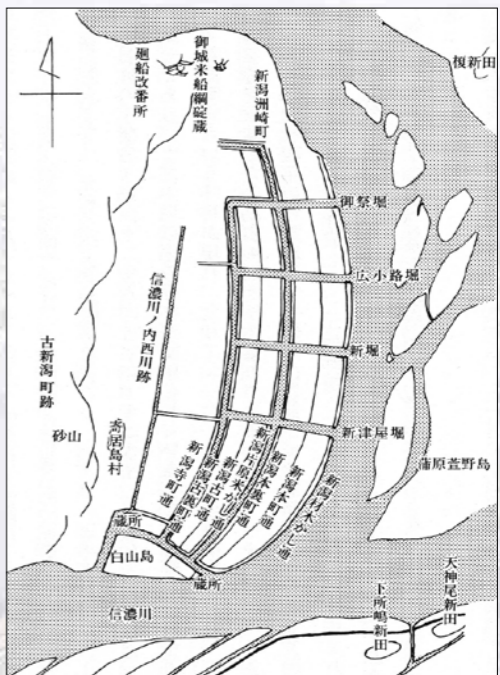
自然の特性と向き合いつながりながら町を維持することも必要でした。

その一つは海岸砂丘からやってくる飛砂です。強風の日は町まで砂が吹き寄せ、冬の強風では砂嵐となります。現在でも冬の季節風によって海岸を通る道路が砂で埋め尽くされるほどです。そのため砂丘に林をつくる

砂防林の造成は江戸時代からすでに行われていました。初代新潟奉行であった川村修就の松の植林はよく知られています。林をつくって砂の害から町を守ることは、新潟町に暮らす人々にとって深刻な課題でした。

また地盤沈下も町の人々を悩ませました。昭和三十年代の天然ガスの採取がひきがねになって地盤沈下は加速しますが、地中深く砂の層が続く平野部一帯は常に沈降していました。

近年、発掘調査によって江戸時代の新潟町の跡が確認されるようになりました。特に広小路地点では、屋敷の基礎や溝などの遺構のほか、当時の人々が使っていた生活用具が多数見つかりました。市街化によって破壊されたと



江戸時代前期の新潟町
〔新潟市史〕通史編1所収：元禄11（1698）年「蒲原新潟立会小絵図」から作成

近代化へのまちづくり

明暦の移転後も信濃川が運ぶ土砂の堆積によって川側へ土地が広がり、港となる川岸は町から離れていきました。新潟町と信濃川は畔下川などの水路で結ばれるようになりました。こうした地形上の変化はあっても、江戸時代を通じて町並みや港としての機能が大きく変化することはなかったと思われま

す。町並みの変化は、開港場となり県庁所在地となった明治初期に現れます。明治五（一八七二）年に新潟県令となった楠本正隆は町並みの拡大や改造に取りかかりました。礎町通や下大川前通などの新たな町割りをするともに、道路の改修や通りに面した建物の庇をそろえたりしました。また、白山神社の境内に白山公園となる新潟遊園も整備しました。

その後も役所や学校などが洋風建築でつくられ、近代的な景観へと変化していきました。

また、明治期、新潟町は度々大火に見舞われました。町の多くを焼き尽くした明治四十一年の二度にわたる大火は、耐火・防火のまちづくりを本格化させ、町の機能性も高めさせました。道路の幅が拡張されたり、行き止まりの道が延長されたりしました。現在のNEX T21と新潟三越の間で行き止まりになっていた榎谷小路もこの時に延長され、東中通側へ通じるようになりまし

た。葺き屋根は瓦に変わっていきました。明治から大正にかけて、江戸時代以来の町並みは近代的な姿へと様変わりしていきました。

町の機能の変化

江戸時代の新潟町は長岡藩の港としての役割を担っていました。城のある長岡が政治の中心で、港のある新潟が商業や流通の中心になっていました。こうした機能が幕末から明治にかけて変化していきました。

長岡藩領であった新潟町は幕末に天領となり、町の中核部には奉行所が置かれました。そして、幕領であり日本海有数の港であった新潟は日本海側唯一の開港場となり、さらに県庁所在地になりました。明治以降、新潟町は商業ばかりでなく、新潟県の政治の中心としての役割も担うようになりまし

た。はじめ新潟県庁は、奉行所建物を引き継いでいました。この場所が現在のNEX T21と新潟三越にまたがる位置です。明治十三年の大火で旧奉行所の建物が焼失した後に、県庁は東中通の新庁舎へ移りますが、旧奉行所の跡地には、明治二十二年から市役所になる新潟区役所が警察署と並んで新築されます。県政から市政へと変化しても、この地区には行政の中心機能が引き継がれます。その後、大火で焼失するこ

とはあっても、この場所に初代から四代目までの市役所が置かれました。その後県庁は東中通から学校町通へ

移り、現在は新潟町地区を離れ、新光町に移転しています。市役所は県庁跡地の学校町通へ移っており、行政の中心は都心部を離れていきました。新潟町地区の機能が大きく変わる中で、その後のまちづくりに大きな影響を与えたのは築港です。開港後も大型船が入港できない信濃川左岸の新潟港に代わって、埠頭を持ち大型船が着岸できる近代的な港湾を建設することは新潟市民にとって悲願でした。大正三（一九一四）年には沼垂町と合併し、新潟市は信濃川右岸にも広がります。そして新潟市域となり鉄道の駅を備えていた沼垂側に新たな新潟港が着工され、大正十五年に完成します。ここに開町以来、港として整備され機能してきた新潟町地区は、図らずもその性格や目的を大きく変えることになりました。

都市化と街の変化

戦後、車社会の到来と都市化によって、昭和三十年代に堀は埋められ、道路へと姿を変えました。また、オフィスビルや住宅などが現代的な建物に変わっていきました。

堀の埋め立ては、港と船の時代の終焉を決定的にしました。近年、新潟情緒の復興とともに堀の復活が叫ばれていますが、復活したとしても船の往來をなくした堀は残念ながら本来の目的を失っています。

都市化は新潟町地区の周辺にもおよ

びました。新潟駅に近い万代には新潟交通のバスステーションができ、昭和四十八年には「万代シティ」として大型スーパーやレインボータワーなどが開業しました。その後も新たな店舗や娯楽施設ができ、広い地域から人が集まる賑わい空間になっていきました。こうして新潟町地区の都市の中心性は次第に薄れていきます。さらに追い打ちをかけるように住宅地が郊外へ広がり、そこへ大型ショッピングセンターができ、人々の動きも中心市街地から郊外へと移っていきました。

思われていた江戸時代の町跡が良好な状態で残っていたのです。しかも明暦の移転当時のものと思われる跡は、現地表よりも二メートル以上も深い場所で見つかりました。海や川の標高と比較しても、人々が生活できる位置ではありませ

ません。沈降によって当時の地面が埋没したと考えられます。その位置から現地地表数十センチ程のところまで江戸時代の町の層が続いており、沈降してはかさ上げして整地する作業を何回も繰り返してきたことが読み取れます。こうして沈下へ対応しながら町を維持してきたことが発掘調査からうかがうことができました。

まちなか再生

近年、都市の魅力を取り戻すことを目的に、住民を交えたソフト・ハード両面によるまちづくりが行われています。新潟市でも「新潟市まちなか再生本部」による報告書が平成二十四年三月に策定され、中心市街地の活性化に向けた提案がまとめられています。

平成二十二年の中間報告では、建築家・隈研吾氏のアドバイスとして「まちには長く人が住んで染みついていく伝統や歴史があり、それが魅力になっている」と紹介しています。新潟町地区には越後の中核として多くの人口を抱え、四〇〇年にわたる人々の暮らしがあります。それが文化財として、伝統として、今も息づいています。今後こうした資源を大切にしたいまちづくりが期待されます。

（こばやし たかゆき 学芸員）